

## 黒沢の自然が生み出した宮林の風穴と百戸沼



宮林の風穴

黒沢地区には、慶長16年(1611)に会津を襲った大地震の際、高力山<sup>たかつと</sup>が山体崩壊し、その時に大きな岩石が堆積してできた空洞が「宮林の風穴」となりました。現在も夏は涼風、冬は温風が穴の底から吹き上げ、冬でもここだけは雪が積もりません。四季を通して岩石は苔<sup>こけ</sup>むしてみずみずしく、真っ青で独特の空気感を醸し出しており、木々の間から差し込む日光に照らされて幻想的な空間が広がっています。

宮林の風穴からは今でも11月ごろの寒い日に大気の関係で水蒸気が真っすぐ上昇するのを何回か見ることができます。昭和40年頃までは、秋の寒い朝に風穴から吹き上がる真っ白な水蒸気が20分ほど舞い上がり、地元の人達は秋の天気を占うバロメーターとしていました。真っすぐ上昇するときは「晴れ」、川下にたなびく時は「雨」となり、地元の人達は秋の取入れに重宝していたようです。また、以前は風穴から水蒸気が上がる時、ゴーと音がしましたが、今でははかすかに聞き取れる程度です。

風穴の周辺には天神様、山の神、愛宕様などの石祠がいくつかあり、石灯笼には文化9年(1812)と彫られています。私が子供の頃は、4月1日にはコーセン祭を行っていました。このお祭りは何のためか定かでないですが、コーセンとは小麦や柿の皮を石臼で粉にし、わらで編んだワラダに入れてお詣りしました。お賽銭はみんなで分け、茶屋で買い込んだことを思い出します。

また慶長16年の大地震で山体が崩れて、木地夜鷹山の山中に百戸沼<sup>ひやっこぬま</sup>ができました。大地震前の天正6年(1578)に加賀茂助・彦助兄弟が黒男鉱山を開いて金や銅を採掘し、百戸沼周辺には鉱山で働く人々、木地師、漆かき職人たちが山小屋が480棟あったとされています。現在も、当時の面影として広大な慶成屋敷、上の屋敷、槍つき、三貫目などの鉱山跡を見ることができます。



### 今月の表紙

今月は昨年4月に町内で撮影した写真です。手前にある菜の花と奥の桜のコントラストで、鮮やかな「春」の季節を感じていただければと思います。

### 編集後記

広報の新しいロゴの作成にあたり、森倉さんには計6案を提案していただきました。それぞれに色々な思いが込められており、このロゴを選ぶのにとっても悩みましたが、今回のロゴに無事決まってホッとしています。広報紙の顔と言っても過言ではないロゴ、込められた思いとともに大切に使用していきたいと思えます。さて、今もなおコロナ禍による窮屈な日々が続いていますが、令和3年度も町の明るい話題や情報を町民の皆さんにお届けしていきたいと思えます。これからも取材へのご協力よろしくお願ひいたします！(秦)